

鳥取県の農業

－鳥取県の芝生産を中心に－

2 回生 伊藤敏希

1. はじめに

現在鳥取県の農業生産高は増加傾向である。2010年の農業産出額は435億円であったが、2016年には494億円にまで上昇している。それに対して、鳥取県の農業従事者数は2010年に約62000人であったが、2015年には、約47000人までにも減少している。このような状況でもあるにもかかわらず、農業生産高が増加している現状とその背景について明らかにする。また、鳥取県の農業の特徴の一つに芝生産が盛んであることがいえると考えている。その芝生産は、全国2位の出荷高を誇り、全国有数の芝の生産地である。その芝生産から、鳥取県の農業の特徴を現状の把握と聞き取り調査を踏まえて考察していく。

2. 鳥取県における農業生産

まず、鳥取県の農業生産の概要を捉える。図1は2020年の都道府県別の農業産出額を表したものである。図1より鳥取県における農業産出額は475億円であり、全国的に見ても少ない県であるということがわかり、農業産出額の全国順位は40位となっている。これは、全国1位で5207億円の北海道の10分の1以下、全国平均の1202億円の4分の1程度となっている。また、鳥取県以外の県をみると、農業は東日本や九州で盛んであり、逆に本州の西側ではそれほど盛んではなく、特に日本海沿岸の山陰から北陸（富山県）まで農業産出額の低い県が並んでいる。これは日本海側地域特有の雨や雪の降水量が多いという気候の問題が理由としてあると考えられる。また、東京都付近の関東の県では、農業産出額が大きい傾向にあり、これは人口が多い県の近郊で農業を営む近郊農業が行われているということがわかる。

次に、鳥取県の農業従事者と農業産出額を見ていく。図2と図3は全国の農業従事者数の推移と鳥取県の農業従事者数の推移を表したものである。これより、全国の農業従事者数は年々減少しており、高齢者の割合も増加しているという傾向がある。鳥取県も例外なく、全国的な現象に当てはまっており、特に高齢者割合の増加が著しい。1985年の65歳以上の農業従事者の高齢化率は約20%であったのに対し、2015年には約45%にまで上昇している。このことについて、鳥取県農林水産部農林水産政策課に聞き取り調査を行ったところ、鳥取県の農業産出額は1985年には約800億円だったのに対し、2015年には約500億円と約3割も減少してしまうという影響が出ているとのことであった。それに加え、中山間地域を中心に耕作者のいない耕作放棄地が増え、鳥獣被害も続出し、中山間農業の経営継続が難しいという現状にもなっているとのことであった。

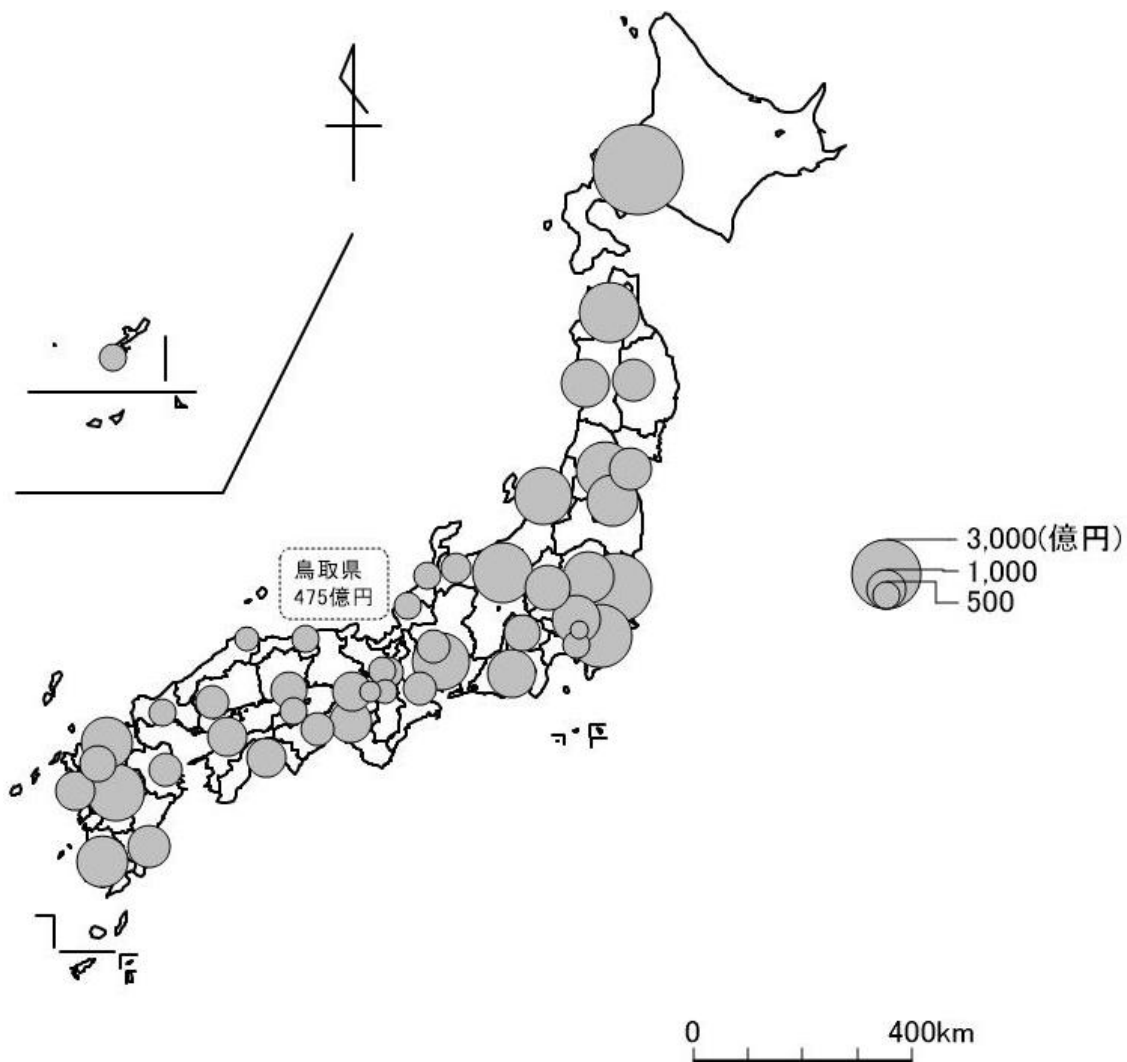


図1 都道府県別の農業産出額<耕種> (2020年)
(生産農業所得統計より作成)

図4は、鳥取県における農業産出額（耕種）の推移のグラフである。これより、鳥取県の農業産出額において、2010年から2016年にかけて増加しており、その中でも野菜の産出額が増加していることがわかる。全体の農業産出額は2010年の435億円から494億円へと上昇し、特に野菜の産出額は198億円から236億円へと上昇した。この原因として、産出額を引き上げているのは主に野菜類と花き類であり、野菜類に関しては低コストハウス導入等の増加による園芸品目（アスパラガス・イチゴ・スイカなど）の栽培面積の増加、花きに関しては芝生産の拡大、花壇苗や切り花の裏作といったことが挙げられるとのことであった。

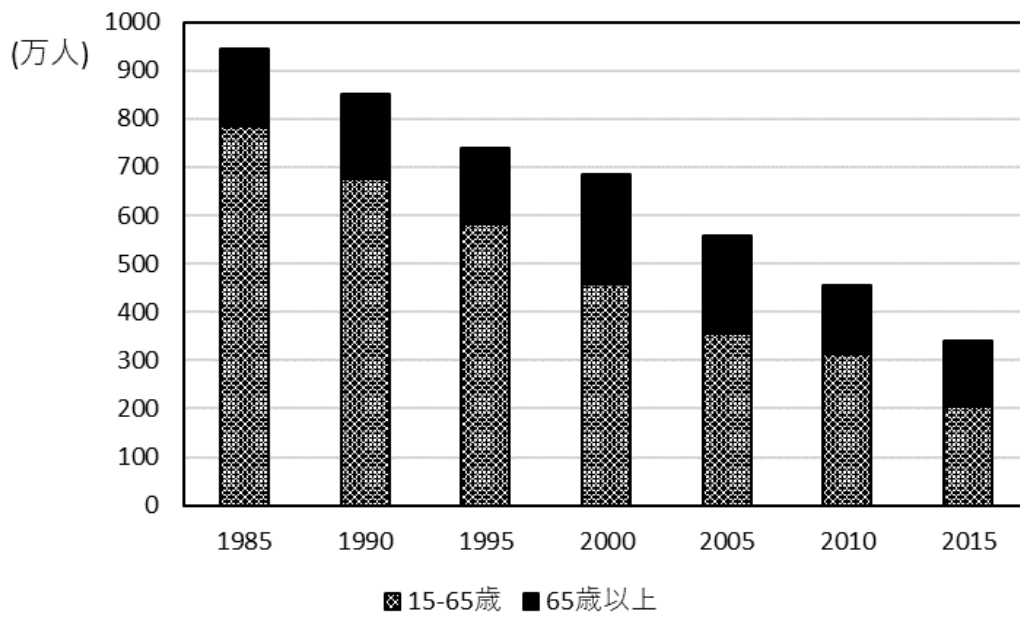


図2 全国における農業従事者数の推移
(農業センサスより作成)

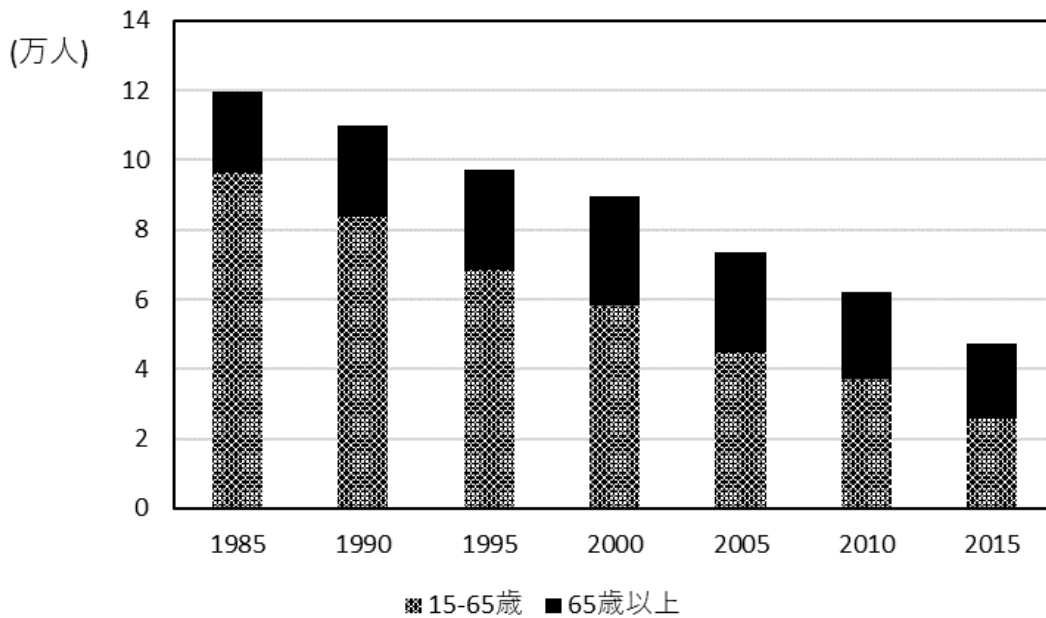


図3 鳥取県における農業従事者数の推移
(農林業センサスより作成)

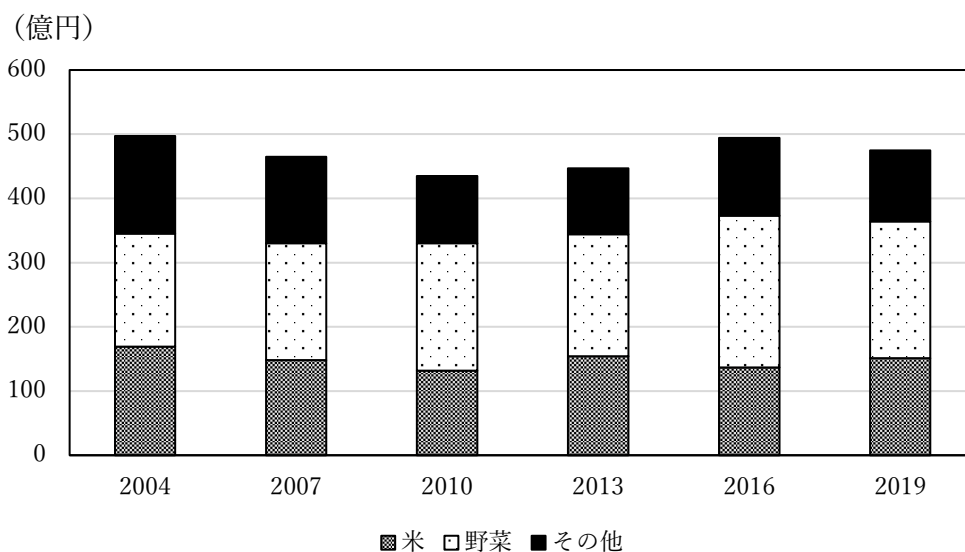


図4 鳥取県における農業産出額（耕種）の推移
（生産農業所得統計より作成）

図5と図6は全国と鳥取県の農業産出額の内訳を表したものである。これらを比較すると、全国の野菜の産出額は全体の38%であるのに対し、鳥取県の野菜の産出額は45%と全国に比べ野菜の産出額が高めになっている。これは、鳥取県農林水産部農林水産政策課によると、特に鳥取県の海岸沿いの水はけのよい砂丘地帯でのスイカやラッキョウの生産、また大山の火山灰などが堆積してできた「黒ぼく」と呼ばれる肥沃な土壌での長ネギやブロッコリーの生産など、地域の特性を生かした農業がおこなわれており、近年では、特に地域の生産者が中心となって、北栄町や倉吉市のスイカ、琴浦町や大山町のブロッコリーといった地域産品のブランド化を進めており、栽培方法の確立と品質の向上が販売価格の向上につながっているとのことであった。

3. 鳥取県における芝生産

次に鳥取県における芝生産に焦点を当てる。図6において、芝は「花き」に分類される。農業産出額（耕種）の割合では、全体の約6%にあたり、割合は少ない。表2では、都道府県別の芝生産状況を表に表した。花木等生産状況調査によれば、現在芝を生産している都道府県は以下の5つの道府県であり、全国的には生産地が少なく、貴重な作物であると考えられる。全国で最も芝生産が盛んであるのは茨城県であり、全国の芝の作付面積の約68%を占め、出荷額は約52%である。鳥取県の作付面積は全国の約19%であるのに対して、出荷額は全国の約27%となっている。鳥取県の芝生産は、農業産出額全体の農業生産高が40位だったのに対し、作付面積、出荷額ともに全国2位となっている。すなわち、鳥取県の芝生

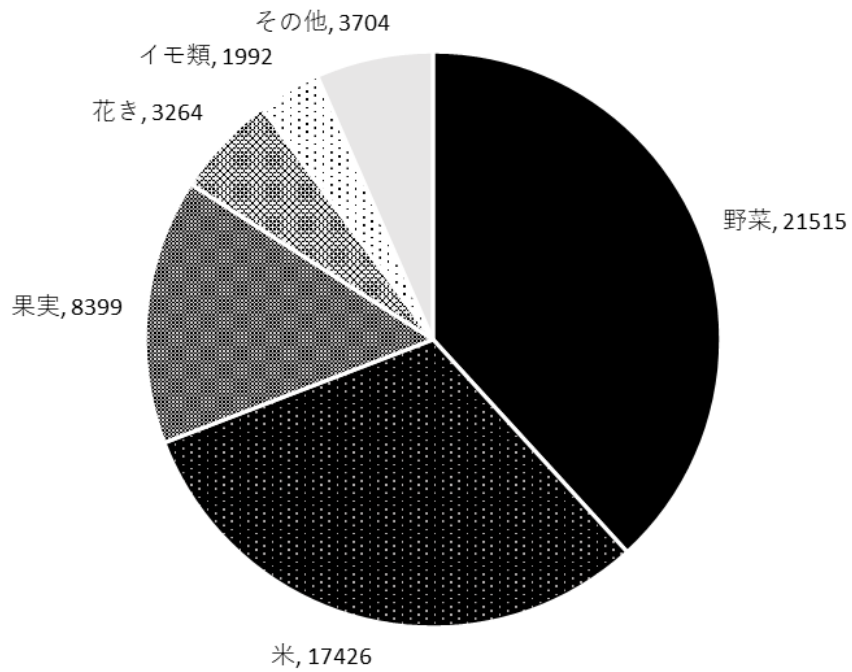


図5 全国における農業産出額（耕種）の割合（2019年）
 （生産農業所得統計より作成） 単位：億円
 ※農業産出額（耕種）合計：5兆6300億円

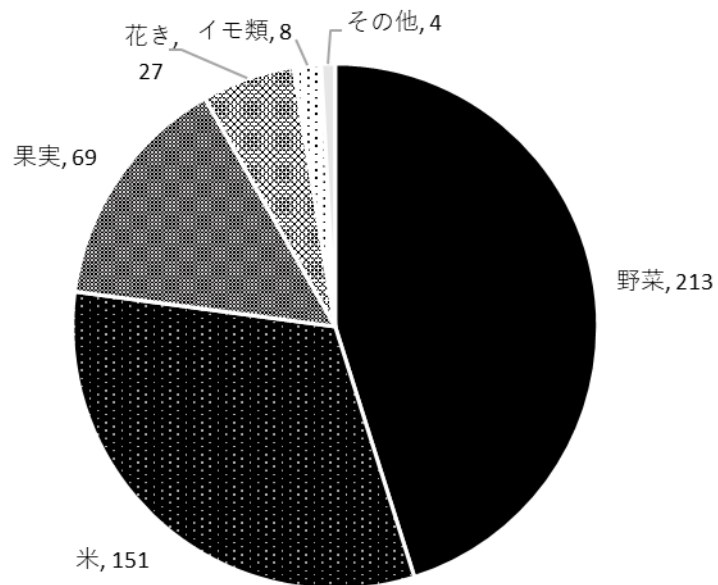


図6 鳥取県における農業産出額（耕種）の割合（2019年）
 （生産農業所得統計より作成） 単位：億円
 農業産出額（耕種）合計：475億円

表2 都道府県別芝生産状況

	作付面積(a)	出荷額(億円)	1aあたりの出荷額(円)
茨城	310000	31	10000
鳥取	84807	16	18866
鹿児島	33591	4	11907
北海道	18420	7	38002
宮崎	6033	1	16557
合計	452851	59	

(農林水産省 花木等生産状況調査より作成)



図7 国内の黒ぼく土の分布
(南条・水野, 2019 より引用)

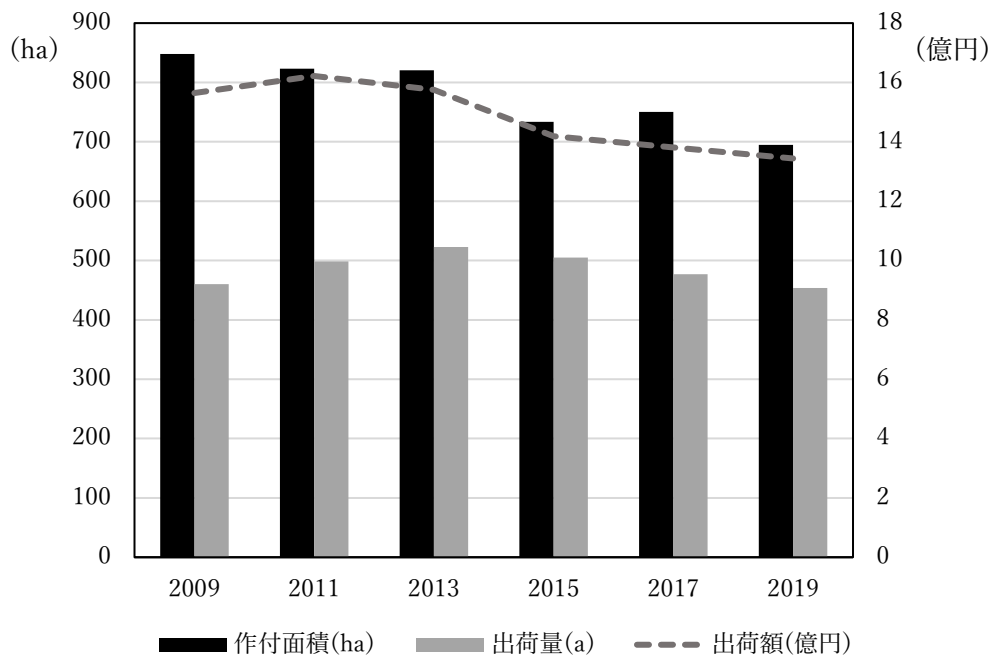


図8 鳥取県における芝生産状況の推移
(農林水産省 花木等生産状況調査より作成)

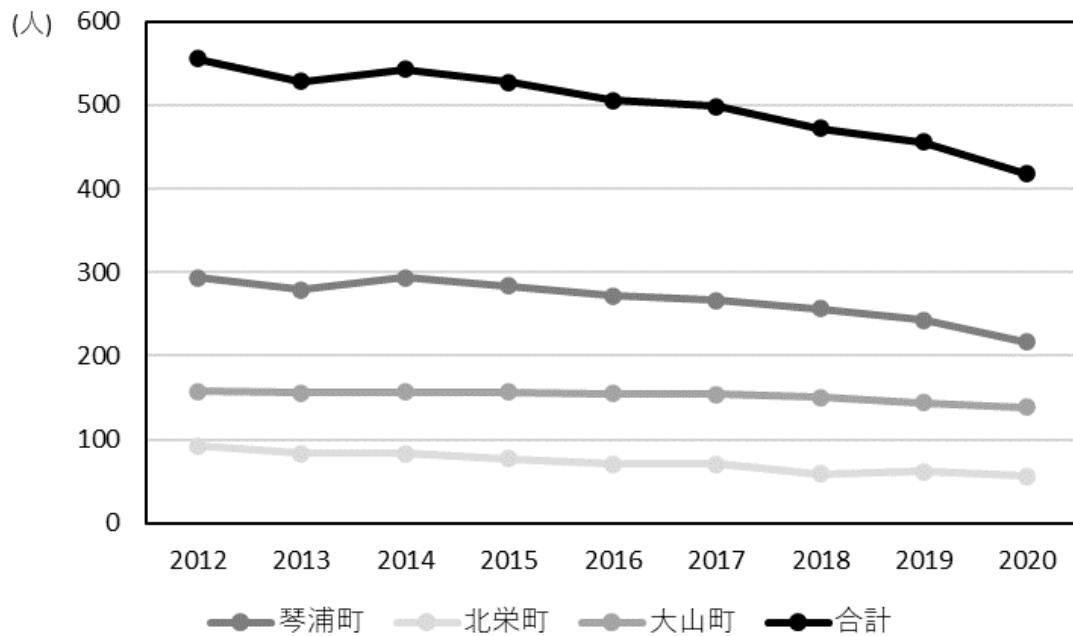


図9 鳥取県芝生産者連絡協議会内の芝生産者数の推移
(鳥取県芝生産組合提供資料より作成)

産は、県内で農業産出額（耕種）の割合の割合は少ないものの、全国的には上位にあたることから、鳥取県の農業の特徴の一つであると捉えられる。

図7は日本の火山灰土の分布を表したものである。これを見ると、表2に示されている道県のいずれも火山灰土があるところであるということがわかる。これより、芝生産には火山灰土が分布しているということが必要であるといえ、鳥取県を見てみると、大山周辺に火山灰土の分布がみられる。また、鳥取県の芝の1aあたりの出荷額は18866円に対して、茨城県は10000円であることから、1aあたりの出荷額が茨城県よりも高いということがわかる。

図8は鳥取県全体における芝の作付面積・出荷量・出荷額の生産状況の推移を表したグラフである。また、図9は鳥取県芝生産者連絡協議会内の芝生産者数の推移を表したものである。これらから、芝生産者の減少は著しいものの、作付面積・出荷量・出荷額は、生産者の減少よりも減少が緩やかであり、現状を維持しているように見える。実際に、生産者は2012年から2021年の間で32%減少しているのに対し、出荷量は2009年から2019年で1%しか減少していない。また出荷額は2009年から2019年で15%しか減少していない。このことについて、鳥取県農林水産部農林水産政策課に聞き取り調査を行ったところ、耕作放棄地に芝生の植え付けを行うことにより、作付面積・出荷額等を維持しているとのことであった。また、鳥取県芝生産組合の中本組合長にも聞き取り調査を行ったところ、芝生産者の減少は芝農家の高齢化による農家の離農、芝農家の後継者不足によるものであるとのことであった。

鳥取県芝生産者連絡協議会では生産者は2012年には555人であったのが、2021年には396人に減少してしまっており、32%も減少している。このように芝農家の離農が続いているために、芝農家1戸当たりの芝の作付面積は増加傾向にあり、2005年には1戸当たり1.05haであったのが、2020年には1戸当たり1.85haにもなっている。1戸当たりの面積が大きくなっており、生産者の高齢化とも重なり非常に重要な問題となっているといえる。

このような現状の対策として、2017年に鳥取県芝生産組合・鳥取大学・鳥取県・琴浦町などが共同で芝の収穫機（結束機）を開発した。このことについて、鳥取県芝生産組合の中本組合長によると、収穫機は現状、3人で使用するものであり、組合員の世帯では夫婦2人で作業することが多く、2人でも作業が可能なように改良していくことが求められているとのことであった。鳥取県芝生産組合でも収穫機は常に倉庫に保存されている状況であり、実用化されているとは言えない状況にある。機械が開発される前と同様、手作業で収穫を行っている状況にある。

聞き取り調査及び朝日新聞記事（2020年4月9日鳥取版）によると、他の対策として、芝の出荷業者や鳥取県などがつくる鳥取県芝生産者連絡協議会は、新規後継者の獲得、とっとり芝ブランドの認知拡大のために、2020年琴浦町内に「芝王国とっとり」推進本部を開設した。代表的な事業として、本部には『芝王国とっとり』推進本部」と書かれた木

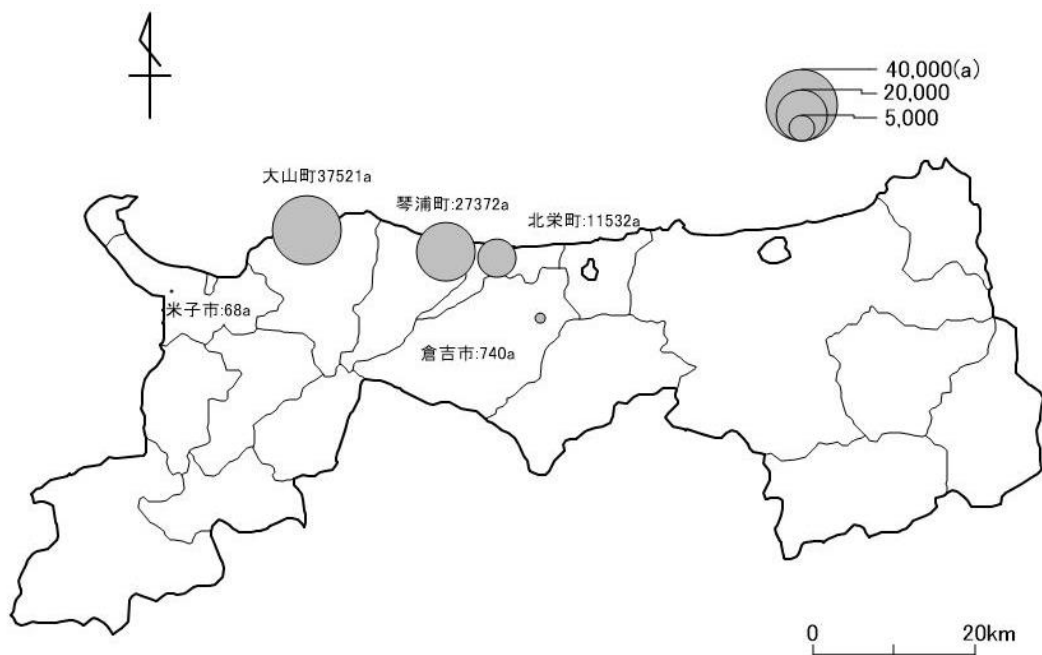


図10 鳥取県内による芝生産の分布（2020年度）
（鳥取県芝生産組合様提供資料より作成）

製の看板があり、また鳥取県芝生産組合の車には「芝王国とっとり」と書かれたマグネット式のステッカーを作成し、鳥取県産の芝のPRを行っている。また、農業大学校や農業高校対象の講義やインターンの受け入れなど新しい担い手の確保を目指しているという。

鳥取県内各市町村別の芝の生産量の分布に注目する。図10より、鳥取県内の芝生産は主に西部で行われており、特に大山町・琴浦町・北栄町で盛んである。大山町は鳥取県全体の約48%の芝の作付面積があり、琴浦町は35%、北栄町は15%であり、この3町で鳥取県全体の98%の芝の作付面積になる。これらの町には大山の麓であるということが共通している。これは、大山山麓には2章でも述べたように黒ぼく土が分布しており、その黒ぼく土が芝生産に適していることが大きく影響していると考えられる。

また、これらの地域で芝生産が盛んな理由には人的な要因もある。それは、鳥取県芝生産組合の中本組合長によると、1958年ごろ、戦後の食糧難に対応するために畑作の大半を澱粉甘藷や桑を育てていたが、それらの価格の低落により農家が経済的に苦しめられることとなった。その対応策として、1958年当時の東伯町長がこの状況を打開するために畑で芝を栽培することを普及させていったとのことであった。その際芝生産が選ばれた理由として、比較的栽培が容易で芝が安定した作物であること、当時、これから芝の消費が高まると予想することができたことが挙げられる。そのため、芝生産はこの60年で始まった比較的最近始まった農業であるといえ、現在は芝農家の減少など、芝生産が危機的状況を迎えており、一つの転換期を迎えているといえるのではないかと考える。



図 11 琴浦町松谷地区の位置
 (国土地理院地図に加筆)

市町村よりもさらに小さな範囲でどのようなところで芝生産がおこなわれているのかを調査した。琴浦町は、農業が鳥取県で最も盛んな町であること、芝生産発祥の地であることから琴浦町を調査地として選定し、その中でも航空写真で特に多くの芝畑が確認できる琴浦町松谷地区で現地調査を行った。図 11 は調査地域である琴浦町松谷地区を表している。松谷地区は琴浦町中部に位置し、地区は山陰道から大山山麓まで、南北に長く広がっている。

図 12 より、大山山麓地帯であるということから、等高線の重なりがみられるという点を読み取ることができる。また、等高線の重なりが多い地域と少ない地域があることから、多い地域は谷になっており、少ないところは丘陵地域となっていることがわかる。芝生産はこの等高線の重なりが少ない丘陵地域で行っているということがわかる。現地調査では、谷では水田、丘陵地域には、芝・果樹・飼料作物・畜産試験場などの牧場が立地していた。その中で、芝は松谷地区のうち、北側の鳥取県家畜試験場の周辺と、南側に多く分布していた。また、芝畑の大きさは北側の地域は比較的小さく、南側は大きくなっていた。芝生産において使用する農業用機械は小さいものが多く、小規模な圃場でも芝生産は可能であるという。

図 12 の南側にあたる標高が高い地区では土地が広く、農業をするために開拓されたところであり、また前述したように黒ぼく土も堆積している。このような土地で芝生産がよく行われる傾向にある。圃場内は、水田のように平らに整備されているところは少なく、高低差がある圃場で芝生産は行われていることが分かる。

IV. おわりに

本稿では、鳥取県の農業従事者数、農業産出額の特徴について検討した。鳥取県の農業従事者数は減少しており、従事者の高齢化も進んでいるのにも関わらず、農業産出額は近年増加している傾向にあった。これは、鳥取県の生産者が主体で進める野菜のブランド化を行い、品質の向上、鳥取県の特色でもある芝生産の拡大などの園芸作物の農業産出額が増加していることが要因であるということが分かった。

また、鳥取県における芝生産は全国有数の生産量を誇っているにもかかわらず、「芝王国とっとり」としてブランドを近年認知させようとしている段階で、広く県内外で認識されていなかったが、国立競技場の天然芝が鳥取県産の芝を採用されたように、全国に「鳥取県の芝」は徐々に認知されつつあるということが分かった。

しかし、その芝生産においても全国的で農業全体にも共通した高齢化、後継者不足が重要な課題であるといえる。このことについては、鳥取県芝生産組合の中本組合長も非常に悩んでおられ、県内の農林高校での説明会などを開いているが、飛躍的に後継者を獲得できる見込みはない。しかし、このような地道な活動を続けていかなければ、若い後継者を獲得することができないため、非常に重要な活動であると考えます。また、鳥取県芝生産指導者連絡協議会に属する 11 の会員も協力して、このような状況を改善できるような取り組みが今後求

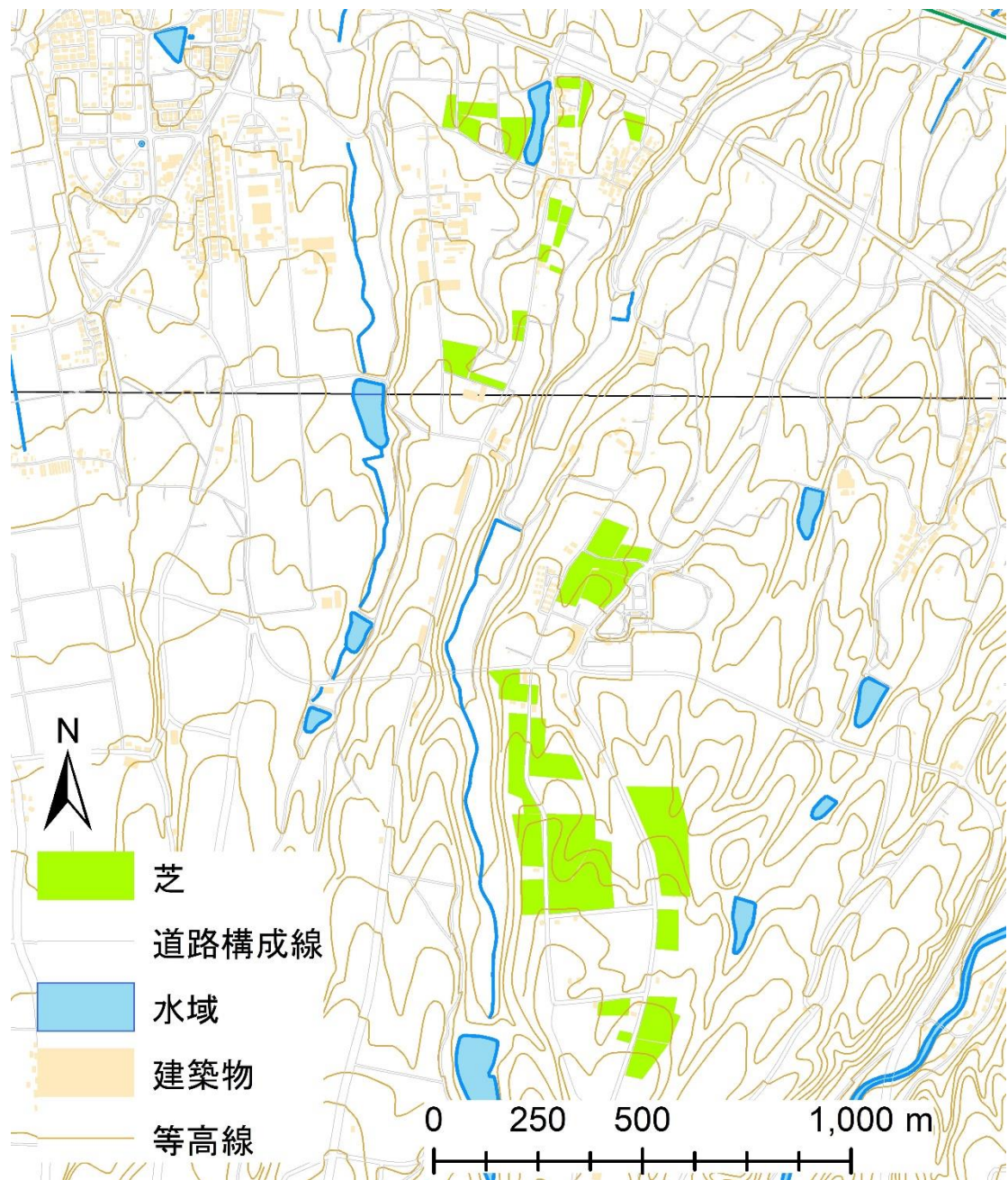


図 12 琴浦町松谷地区の芝畑の分布
(現地調査より作成)

められるのではないかと考える。

また、読売新聞記事（2021年6月18日鳥取版）によると、2021年の6月に琴浦町議会では東伯総合公園サッカー場における芝を、地元産の天然芝ではなく、人工芝とするという案が可決された。当初は天然芝にするという案もあったというが、1年中使用することができ

ない、管理費がかかってしまうといった理由でのことである。人工芝の方が通年利用されるとはいえ、県内産の芝が、国立競技場や甲子園球場、大山町の鳥取県フットボールセンター大山など県内外で採用されており、鳥取県の芝の発祥の地でもある琴浦町において、地元産の天然芝の需要がなくなってしまうということは、経済的にみれば非常に残念なことである。今後は地元自治体も含めて、官民一体となって、地元産の芝の需要が見込めるような事業を展開することが期待される。

－付記－

本稿を作成するにあたり、鳥取県芝生産組合の中本昭典様、鳥取県農林水産部農林水産課の岩谷圭様、琴浦町農林水産課の谷岡彦史様には大変お忙しい中にもかかわらず、大変お世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。

－参考文献－

- ・鳥取県芝生産組合 1999. 鳥取県芝生産組合創立 40 周年記念鳥取県芝 40 年のあゆみ 鳥取県芝生産組合編
- ・鳥取県芝生産組合 2009. 鳥取県芝生産組合創立 50 周年記念鳥取県芝 50 年のあゆみ 鳥取県芝生産組合編
- ・鳥取県芝生産組合 2019. 鳥取県芝生産組合創立 60 周年記念おかげさまで 60 年 鳥取県芝生産組合編
- ・農林水産省 生産農業所得統計
https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/
(最終閲覧日 2021. 10. 24)
- ・農林水産省 農林業センサス
<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/> (最終閲覧日 2021. 10. 24)
- ・農林水産省 花木等生産状況調査
https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/hana_sangyo/ (最終閲覧日 2021. 10. 24)
- ・南條正巳, 水野直治, 2019. 国内の火山灰土壌の分布とその特性. 農業および園芸 94 (9) : 769-775.

